

南方(その他)

従軍と家族の状況

京都府 矢野 美三雄

一 外地派遣

昭和十七年一月初め、当時二十六歳であった私は、友の多くは支那大陸で散華したので、私もやがて召集され戦死の順番がくると予期していた。

期を同じくして七年近く勤めていた舞鶴海軍工廠會計部の主計少佐のすすめもあって、この際、南方の特設海軍経理部の軍属志願する決心をした。

軍人で戦死するも軍属で死すもお国のためなら同じこと、南方進出に踏み切ったのである。

同年二月十一日、緒戦の勝ち戦で無敵海軍と豪語していた海軍の一員として郷土の氏神にもうで武運長久を祈願し、肉親、親戚、知己に送られて、懐かしの故郷を後にしたのであるが、生母は私の戦争に行くのを聞いて二十日余は床に伏し、十一日にも悲しい別れで玄關まで見送ってくれた。それが今生の別れであった。

二月十二日呉海軍軍需部に設置された百二海軍経理部設立事務所に出頭した。

私は海軍官庁よりの転雇者のこと故、新規採用者より幾分優遇され、給与の点も日給の二八掛けで月給となり、戦時増俸も本給の十五割という破格で、収入は工廠の工員の最上級の工長(部内限り判任官待遇)と同じ位で、如何に命を的に戦地に赴くのであるとはいえ有難く思った。

呉に約二週間滞在し、人事や物品の整理に忙しく、二月二十五日に母港呉軍港を出帆した。

乗船は海軍徴傭船「東京丸」で勝ち戦さといえ単船で擬装の大砲と数名の警乗兵士で心細いものであった。同乗はいづれも蘭領へ行く軍需部、燃料廠、病院等の数百名であった。

もとより身分は雇員で兵並で、船倉の底深く居住区をあたえられ、むし風呂のような暑さで、南下するに従い暑気さらに加わり、南洋の熱帯圏だなあと身にしみ感じた。

途中、ミンダナオ島のダバオに上陸し、生まれて初めて南洋の土を踏み、バナナやパイヤをたらふく食べた。

さらにセレベス島のマカッサルに入港し、先着の経理部支部に一週間仮入隊し、戦禍を受けているとはいえ蘭領東印度の状況を垣間見し、オランダの生活振りを感じ、敵国とはいえその文化生活に感心したものである。

マカッサル発、三月二十三日「興安丸」に経理部の

み便乗し、スラバヤ沖を通過し三月二十五日に最終任地ボルネオ島バリックパパンに到着した。

思うに、直行なれば短日数で着くのを、「え」の字航海や待機で延々一カ月を要した。それでも途中潜水艦や飛行機の攻撃もなく安着したのは幸であった。

任地ボルネオのバリックパパンは周知の通りの油の都で、林立する石油タンクには目を見はったものである。

その頃、日本国内は諸戦で勝をしめたといえ石油資源を南方に求め、その開発で軍艦や飛行機を動かすのであるが、当時の言葉を借りれば「ガソリンの一滴は血の一滴」に当ると、持たざる国の悲哀であった。

スラバヤ沖海戦も日本軍の勝利に帰したといえ、蘭軍はバリック撤退の際B P M(オランダの石油会社)の完備した石油精製設備をこわし、剩え原油汲み上げのやぐらまで破壊していたので、その復旧のため内地より特設海軍燃料廠の進出あり、日夜石油資源確保のため努力した。海軍担当地域のボルネオは文字通り海軍の原動力の根源をなしていたのである。

話は前後するが、その地に派遣された海軍経理部は第二南遣艦隊所屬で、第百一海軍経理部（本部スラバヤ、支部バリックパン、マカッサル）は海軍の勘定方で、多額の軍票を管理し艦船部隊各庁の予算、決算、給与の支払い、軍需物資、被服食糧の調達や支払い、恤兵品や酒保物品の購入保管、支払いや海軍徴備船舶に対して船用金の貸付等が主たる任務で、それに加えて会計経理の指導監査も所掌の事項であった。

二 生計維持

農家の三男でしかも独身であり、父母、兄夫婦も健在で、家計、生活費に困るといった苦しさは皆無で、しかも召集を逃れるために軍属を志願したのであるから、軍人の赤紙召集とは給与の面でも大差があり、ただ敵弾は軍人軍属のへだてなく当たり、同僚も多く戦死したのは気の毒であった。

三 家族変動

私は昭和二十一年六月五日復員し、汚れた服と乱髪に不細工なりュックを背負い、村の鎮守の松並木をほとほと帰って来たのである。

私の復員をラジオで知った父は、嬉しさの余り隣近所にふれ廻ったそうであるが、当時六歳位の甥が神社の辺りまで迎えに来てくれていた。

甥は開口一番

「叔父さん、祖母ちゃん死んちゃったのを知ってるか」

私は一瞬眼前の暗くなるのを覚え、我が家へたどりついた。

休む間もなく母の墓へ参り男泣きに涙の乾く間もない程泣いた。

無学で家付き娘として父をむこ養子に迎えた母は、子ほんのうで末子の私を殊更に可愛がってくれた。

私の従軍中は、三度、三度陰膳を据えて、ひもじい思いをさせられぬと心配してくれた。私にとってはかけがえない母が死んだと思うと、何か大きな穴があったようで悲しさ一杯であった。

落ちついてから父や兄から母の最後の模様を聞いたのであるが、昭和十九年九月一日午前九時とのこと何と不思議なことである、私が同日大爆撃に会い経理部

庁舎前の防空壕で爆風による土砂くずれひどく今日は最後かと思ったのと同時に母は炎天の下での稲刈りで田ほの畔で心臓衰弱（生来心臓弱し）で息子の帰日も待たず死んだのである。

父や兄等は母が身代りになったのであるといった。

母子の絆は科学では説明できないものがある、私はここから母の冥福を祈った。

近所へ復員の挨拶に回った折り、ある家は、三人の息子を皆戦死させて老母がさびしく息子の嫁や孫と暮らしていた。

私の母の死をいたみ、母親の立場で私の母なきさびしさを思い存分に涙を流してもらい、私も幼な友達で老母の息子の戦死に対して、ねんごろに同情の言葉をかけ実母に会ったような気持であった。

戦時中は天皇陛下の御為、国の為と随分美しいことをのみいていたが、いざ別れるとなると骨肉の情は只々悲しみ丈であると思った。

されど私の場合には親は何時までも生きていてもらいたいものであるが親死に子死に順序であれば、お目出

度い、と追々心を持ち直しあきらめたのである。

現在、幸に私は子と孫とで六人健在であるが、妻に母親は丈夫で父親より先に逝くことないよう長生きしてくれと話している。

長い旅路

福岡県 福成 善太郎

私が二度目の召集令状を受取ったのは、北支天津市日本租界の棉花貿易商社に勤務していた時でした。所謂、現地召集です。天津より二泊三日目に山西省運城に駐留していた冬兵团第三十七師団（昭和十三年久留米師団編成）輜重第三十七連隊へ入隊。当時戦局は既に敗色濃くなっていた昭和十九年二月十日でした。

部隊の兵隊たちは熊本師団管轄下の熊本、鹿児島、宮崎、大分、沖縄県出身の兵隊に入れ替っており、それに第四十一師団からの転属兵と我々現地召集兵の混成で、一個班の構成は総員十五名位だったか、内訳は